



# 自然遊学館 だより

## 2012 SPRING

### No.63



#### ハイロチュウヒ（タカ目タカ科）

貝塚人工島（貝塚市二色南町）にて2012年3月16日に食野俊男さんが撮影。綿石慶太さんから生息情報をいただき、食野さんに撮影を依頼していたものです。

2012.4.30 発行 貝塚市立自然遊学館

### 目 次

#### \*ネイチャーレポート

##### 貝塚市の外来生物リスト

……………岩崎拓・湯浅幸子・山田浩二… 1

トベラと節分 ……………岩崎拓… 2

花と鳥達 ……………石毛久美子… 6

##### 近木川河口で見つかったハナガスマカノコ

……………和田太一・山田浩二… 7

【鉱山探訪】 大塔鉱山……………川村甚吉… 9

#### \*行事レポート

春の七草摘みハイキング ……………白木江都子… 10

打ち上げ貝拾い ……………山田浩二… 12

##### 千石荘&近木川河口バードウォッチング

……………和田太一… 13

自然を食すⅢ ……………川村甚吉… 15

#### \*館長コーナー

桜に想うⅡ……………高橋寛幸… 16

#### \*調査速報

アミカ ……………岩崎拓… 18

#### \*泉州生きもの情報

二色の浜に打ち上げられたヒラタブンブク

……………山田浩二… 21

ヤドリギの実 ……………岩崎拓… 21

\*寄贈標本の紹介 …………… 23

\*新スタッフ紹介（久妻さゆり・岡田真太郎）… 27

\*スタッフ日誌 …………… 28

\*お知らせ …………… 28



## ネイチャーレポート

### 貝塚市の外来生物リスト

2011年2月に行われた第2回小さいとこサミットの議題の一つが外来生物の扱い方でした。その報告は本誌59号でさせていただきますましたが、その際に誌面の都合で貝塚市においてこれまでに確認されている特定外来生物と要注意外来生物のリストを省略しました。

今年に入ってから、二色の浜で特定外来生物のヌートリアの死体が打ち上げられたこともあり(図1)、注意を喚起する意味で、貝塚市の外来生物リストを掲載します。環境省が定める「特定外来生物」は、飼育・運搬・保管が禁止されていて、違反すると罰則があります。



図1. 二色の浜で発見されたヌートリアの死体  
常道武士・暢子さんが2012年1月22日に発見  
(全長約85cm)

#### <特定外来生物> 14種

- 哺乳類 アライグマ  
ヌートリア
- 鳥類 ソウシチョウ
- 爬虫類 カミツキガメ

- 両生類 ウシガエル
- 魚類 オオクチバス  
ブルーギル
- クモ セアカゴケグモ
- 昆虫 セイヨウオオマルハナバチ
- 植物 アレチウリ  
オオカワヂシャ  
オオハンゴンソウ  
ナルトサワギク  
ボタンウキクサ

#### <要注意外来生物> 49種

- 爬虫類 ミシシippアカミミガメ
- 魚類 カラドジョウ  
グッピー
- 貝類 コウロエンカワヒバリガイ  
スクミリンゴガイ  
ミドリイガイ  
ムラサキイガイ
- 甲殻類 アメリカザリガニ  
タテジマフジツボ  
チチュウカイミドリガニ
- 植物 アカミタンポポ  
アメリカオニアザミ  
アメリカセンダングサ  
アメリカネナシカズラ  
イタチハギ  
エゾノギシギシ  
オオアレチノギク  
オオオナモミ  
オオカナダモ  
オオブタクサ  
オオフトバムグラ  
オニウシノケグサ  
オランダガラシ(クレソン)

カモガヤ  
キシユウスズメノヒエ  
キショウブ  
キダチチョウセンアサガオ 植栽  
コセンダングサ  
シナダレスズメガヤ  
セイタカアワダチソウ  
セイヨウタンポポ  
トウネズミモチ  
ネズミホソムギ  
ネズミムギ  
ノハカタカラクサ  
ハルジオン  
ヒメジョオン  
ヒメムカシヨモギ  
ブタクサ  
ブタナ  
ヘラオオバコ  
ホソムギ  
ホテイアオイ  
ムラサキカタバミ  
メマツヨイグサ  
メリケンガヤツリ  
メリケンカルカヤ  
ランタナ 植栽  
ワルナスビ

(2012年3月31日まで)

特定外来生物を例にしても、ウシガエル、オオクチバス、ブルーギル、セアカゴケグモ、アレチウリ、ナルトサワギクのように完全に定着しているものもあれば、カミツキガメのようにおそらく飼育成体の放逐が原因で単発性の確認に終わりそうなものもあります。

特定、あるいは要注意外来生物に指定される理由は、① 人に危害を加える、有毒、② 地域固有の生態系に影響を与える、③ 農作物を食害する、の3点です。また、このような目立った悪さはしない（あるいは悪さがばれていない）他の外来生物も生息していることにも注意が必要だと思いません。

(岩崎 拓・湯浅 幸子・山田 浩二)

## トベラと節分

市内の小学校で冬の生きものについて調べる機会を得、その際にトベラの葉についていたコナジラミの小さな幼虫の模様がとても綺麗だったことから、この話を始めたいと思います。

名前にシラミが付きますが、哺乳類の血を吸う本当のシラミ（シラミ目）ではなく、植物の汁液を吸うカメムシ目の仲間です（図1）。



図1. アオキコナジラミ幼虫の背面（体長0.8mm）

図1は幼虫で、自然遊学館の顕微鏡では、腹側はほとんど平らな状態で口や脚は認められませんでした。背中中の白い模様はおそらくロウ状物質で、植物の汁液に含まれる糖分のうち不要な量を分泌しているのだと思います。当て推量はともかく、1mmにも満たない黒いシミのような虫に、綺麗な模様があったことに、「自然は芸が細かいな」と感心しました。

それで自然遊学館のある市民の森公園のトベラを調べると、たくさんコナジラミが付いていました。アオキコナジラミという種名です。そのほかにルビーロウムシの幼虫もトベラの葉に付いていました(図2)。これも植物の汁液を吸うカメムシ目の仲間で、カタカイガラムシ科に属します。自ら分泌したロウ状物質で体を覆っていて、じっくり目を凝らしてもどこが頭でどこが尻なのか分かりません(左側が頭かな！)。



図2. ルビーロウムシ (体長3mm)

「おそらく」とか「分かりません」ばかりではクビになってしまうので、トベラを利用する虫を図鑑や文献からひろっ

てみました(表1)。臭い植物にもいろいろな利用者があるものですね。

表1. トベラを餌とする主な昆虫

カメムシ目
キジラミ科
トベラキジラミ
アブラムシ科
ハゼアブラムシ
ユキヤナギアブラムシ
ワタフキカイガラムシ科
イセリアカイガラムシ
カタカイガラムシ科
ルビーロウムシ
ミカンワタカイガラムシ
コナジラミ科
アオキコナジラミ
チョウ目
ササベリガ科
トベラササベリガ
シャクガ科
トベラクロスジナミシャク
(南西諸島)

この中では「冬の虫」とは言えませんが、目にする機会が多いのはトベラキジラミでしょう。名前にシラミが付きますが、これもカメムシ目の仲間で、キジラミ科に属します。目にする機会が多い理由は、トベラハマキフシという虫こぶを作って目立つからです(図3、4)。虫こぶのイメージは球状のものかもしれませんが、葉を巻く虫こぶというのも意外に多いのです。ちなみに、虫こぶの名前はふつう、付く植物の名前+植物の部位+虫こぶの形+「フシ」になっていて、トベラキジラミが作る虫こぶは、トベラ+

葉+巻き+フシという名前が付けられています。

ササベリガ科のトベラササベリガは、当館の館長と顧問を務められた黒子浩先生が2000年に新種記載されたもので、幼虫がトベラの果実内に穿入して摂食するそうです（貝塚市では見つかっていません）。



図3. トベラキジラミ幼虫（体長1.5 mm）  
（トベラの巻いた葉の中にある様子）



図4. トベラハマキフシ  
（撮影：濱谷巖氏）

ここまでは、どれも小さな虫たちの話でした。ここからは自分の思い違いに気付いた話です。トベラをずっと10枚のヘラだと、何も調べずに考えていたのでした（図5）。



図5. トベラの葉

トベラのことをインターネットであれこれ検索していくと、「和漢三才図絵」という18世紀にまとめられた図鑑にたどり着きました。便利なことに複写版が公開されています。その第82巻香木類にトベラが載っていて、「..... 除夜挿之門扉能辟疫鬼故名扉木.....」という記述があります。除夜とは旧暦でほぼ節分に当たります。「除夜にこれを門扉に挿すと病気を流行らせる鬼を追い払うことができるので扉木と名付けられた」程度の意味なのでしょう。ほかに、止比良乃木という字も載っています。こちらは意味が分かりません。トベラの学名の種小名の *tobira* は、このことに由来しているようです。

トベラは節分のアイテムだったわけです。それで自然遊学館に出入りしている

人に聞いても、誰も知らないという返事でした。節分には、豆まきや恵方巻き、ややマイナーになったとは言え、柊鯛（ひいらぎいわし）でしょうか（図 6：近木川水質調査でお世話になっている上之山賢治さんの家の今年の柊鯛です）。



図 6. 上之山家の柊鯛

『まよけの民俗誌』（斉藤たま著）を読むと、「鯛の焼いた臭いを家中に満たす」、「ヒイラギを門に立てる」という柊鯛の話が出てきて、「鯛のほかに毛や葱を焼く」、「ヒイラギの代わりにカヤヤタラノキの木を門に立てる地方もある」と書いてあります。ほかに、「奈良と和歌山ではヒイラギをオニノメツキと呼ぶ」という記述があります。鬼の目突きとはすごい名前をもらったものですね。ヒイラギはご存じの通り、葉にトゲトゲがあります（図 7）。春に出る芽が旨いタラノキも枝はトゲだらけです。



図 7. ヒイラギの葉

トベラの葉にはトゲトゲはありませんが、臭いにおいがします。それが鬼を追い払うと考えられたのでしょうか。湯浅浩史著の『植物と行事』には、「・・・伊勢や出雲ではヒイラギは使わず、葉の周辺に鋸歯の全くないトベラを使う」という記述がありました。泉州ではトベラを挿す習慣がなかったのかもしれませんが。もともと、柊鯛にしても「鯛の頭も信心から」という諺があるくらいですから、信用しない人も昔からいたのだと思います。みなさんはどうですか。

#### 参考文献

Kuroko, H. and R. Gaedike (2006) Epermeniidae of Japan (Lepidoptera, Epermenioidea), with descriptions of six new species. *Trans. lepid. Soc. Japan* 57: 49-69.

#### 参考サイト

イー薬草・ドットコム <http://www.e-yakusou.com>  
 国立国会図書館 近代デジタルライブラリー  
<http://kindai.da.ndl.go.jp>

（岩崎 拓）

## 花と鳥達

### 1. 鳥と共存する庭づくり

今回は庭や公園、ベランダなどで鳥と共存する方法を紹介したいと思います。

アメリカの庭で作られているハチドリ（ハミングバード）のすみかや餌を提供する庭などが良い例になるでしょう。

ハチドリは赤い色と紫外線に敏感だと明らかにされています。そのため赤いろうと状をした花を好みます。花の蜜を吸う鳥類もこの特徴のある花を好むことが知られています。花の蜜を吸う鳥類は<sup>くちばし</sup>嘴がこのような特徴を持つ花を吸うのに適して、細く長い形をしています。

アメリカではビーバーム（レッド・ベルガモット）やフクシア、サルビアなどの植物を植えたハミングバードガーデンが作られています。ハチドリが敏感な赤い色に染めた砂糖水を吸うための餌台を作ったり、庭の植物の間で巣作りをできるようにもしています。

アメリカでは 1971 年以降、ハチドリに足輪をつけるプログラムが始まりました。本格的になったのは 1979 年以降でした。この方法によって渡りについてより詳細な記録が集まるようになりました。また、その他にも様々なことが調査されています。

庭や公園、ベランダを彩る赤いツバキやサザンカ、一斉に群れて咲くサクラの花は鳥達の大切な餌となっています。このような植物を育てることで鳥達が住みやすい街を作ることができます。

また、鳥達によってツバキやサザンカの

花粉が運ばれることでこれらの植物は受粉することができます。これはポリネーションと呼ばれています。

日本では伊豆大島のヤブツバキとメジロの花粉媒介者としての役割について調査され、メジロは重要な花粉の運び手だということが明らかにされています。



メジロ

さらに屋久島の照葉樹林に生えるヤブツバキについても開花フェノロジーという、花が咲いている期間とヤブツバキへの訪花との関係が調査されました。フェノロジーとは生物季節と呼ばれ、気候と植物との関わりについて明らかにするもので、植物の開花の時間的な変化を開花フェノロジーと呼びます。屋久島では、ヤブツバキの花粉送粉者としてメジロとマルハナバチが主要な役割を担っているということが分かりました。

サクラとスズメの間にもこのような関係が見られます。スズメの場合は花の蜜を吸った後に落としてしまい受粉には役に立たないのですが、スズメの<sup>とうみつこうどう</sup>盗蜜行動と言ってスズメがサクラの蜜を利用しているということが明らかにされています。

## 2. 花と鳥達について調査してみよう

このようなツバキやサザンカ、サクラの関係について、街中でも簡単な調査で明らかにすることができます。

庭にある赤いツバキやサザンカ、サクラの一枝にビニールテープなどで印をつけます。これらの花がなかったら鉢植えを買ってきて良いでしょう。そして一枝に咲く花をつぼみの段階から開いて落ちるまで数を数えます。

それから一ヶ月に一回、花を数えるのと同じ日に一時間、花を訪れる鳥類を観察しましょう。これらの花の蜜を好むのは街中ではメジロやヒヨドリ、スズメでしょう。よく図鑑で姿を確認しておいてください。花の写真なども撮っておくと良いでしょう。花を訪れる鳥の様子も庭でしたら動画で撮ることに挑戦してみても楽しいでしょう。

これを数ヶ月続けて最後に結果をまとめましょう。方眼紙を二枚用意します。一枚目には横軸に月を縦軸に月ごとの花数を点で落とします。さらに、二枚目には月を横軸に縦軸に花を訪れて蜜を吸っていた回数を落とします。

さて、どんなグラフが描けたでしょうか。花の数が多いときに訪れる回数が増えていますか？他に何か気がついた点はないでしょうか。メジロになったつもりで想像力を働かせて見ましょう。どんなツバキやサザンカに行ってみたいですか。

ちょっと根気が要りますが簡単な調査で鳥達がどのようなツバキやサザンカ、サクラを訪れるのかよく分かりますね。

沖縄県の西表島のマングローブ林に生

えるオヒルギという赤い花で蜜の量とメジロのやってくる回数について筆者が調査をしました。そこでは夜間、ガ類が訪れていてオヒルギはメジロだけでなくガ類にも花粉を散布してもらっているようでした。夜間の記録をとるのはなかなか難しいですがやってみると意外な結果が出るのが分かります。生き物の調査をすると深く生き物を知る手がかりになります。ぜひ、ツバキやサザンカ、サクラなどで調べてみてください。

(埼玉県入間市 石毛 久美子)

## 近木川河口で見つかった ハナガスミカノコ

ハナガスミカノコ *Clithon chlorostoma* はアマオブネガイ科に属する殻高が 7mm 前後の巻貝です。南方系の貝であるため南西諸島以外での記録は少なく、山口県萩市（和田ほか、1996）、愛媛県（石川・千葉、1999）、和歌山県（三長・三長、2004）、宮崎県（三浦、2008）など暖流の影響が強い場所での記録が知られています。筆者らは 2011 年 10 月 9 日に二色浜と近木川河口で海岸生物の調査を行っていた際に、近木川河口の左岸で大阪湾初記録と思われるハナガスミカノコの生貝を 1 個体採集しました。

本種は、近木川の汽水域でよく見られる同じアマオブネガイ科のイシマキガイ *Clithon retropictus* に比べて螺塔が高いために殻頂部が少し突出して見えます。殻

の表面には少し擦れたような薄い三角模様  
が並んでいます。一番大きな特徴は蓋の  
色で、ハナガスマカノコは蓋に黒い模様  
が入りますが、イシマキガイには黒い模様は  
入りません (図 1)。



図 1. 近木川河口部で採集された  
ハナガスマカノコ

干潟で見られるアマオブネガイ科の仲  
間は汽水域に棲む種類が多く、見つけるに  
は河川の中に出来る干潟や塩性湿地に目  
を向けてしまいがちですが、今回近木川河  
口で見つかった場所は、左岸の海に面した  
干潟の一番沖側の場所でした。干潟に浅く  
埋もれるようにして点在する転石の側面  
に付着していました。干潮時には近木川か  
らの淡水が干潟の表面をわずかに流れて  
いますが、満潮時には完全に海水になるよ  
うな塩分濃度が高くなる場所だと考えら  
れます。和歌山県の西広川河口の生息地は  
三長・三長 (2004) によって環境が詳しく  
記述されていますが、同じように河口から  
外側に広がる干潟の転石地となっています。

どうやら本種は干潟で見られるアマオ

ブネガイ科の中でもかなり海寄りの場所  
に棲むようです。このような特異な生息環  
境のためにこれまで記録が少なかったの  
かもしれません。近年の海水温の上昇など  
によって分布を北上させていることも考  
えられ、大阪湾の他の河川でも探せば見つ  
かる可能性があります。

また、三長・三長 (2004) では本種と同  
所的にカノコガイ *Clithon faba* が生息し  
ていることも記録されています。カノコガ  
イも汽水域に生息する貝ですが、イシマキ  
ガイよりも下流側の塩分濃度が高い場所  
に生息する貝です。今回近木川河口でもハ  
ナガスマカノコと共にカノコガイと思わ  
れる貝類が見つかっています。ただしカノ  
コガイとイシマキガイは殻の模様が非常  
によく似ているものも多く、縦縞模様のみ  
の殻を持つ典型的なカノコガイがまだ確  
認出来ていないため、判断に悩んでいると  
ころです (図 2)。今後も近木川河口でこ  
のようなアマオブネガイ科の仲間の動向に  
注目していきたいと思います。



図 2. 同所的に見つかったカノコガイの  
可能性が高いと思われる貝

謝辞

採集個体をご確認頂き、ハナガスマカノコとカノコガイについて有益な助言を頂いた児嶋格さんにお礼申し上げます。

引用文献

石川 裕・千葉 昇. 1999. 愛媛県産淡水貝類目録. 愛媛県立博物館研究報告. 14 : 4.

三浦知之. 2008. 「干潟の生きもの図鑑」、(南方新社. 鹿児島). 197pp

三長秀男・三長孝輔. 2004. 和歌山県におけるハナガスマカノコの採集記録. 南紀生物, 46(1) : 23-24.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島 哲・山西良平・西川輝昭・五嶋聖治・鈴木孝男・加藤 真・島村賢正・福田 宏. 1996. 日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状. WWF Japan Science Report, 3 : 16 pp.

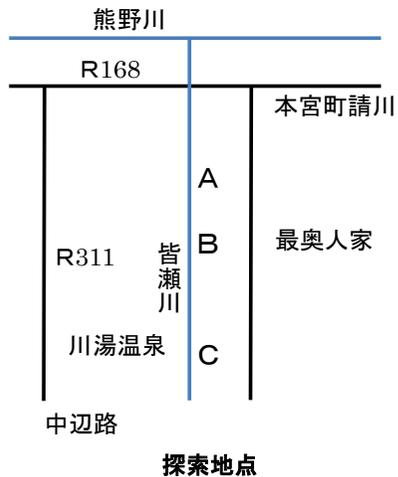
(和田 太一 (NPO法人南港ウェットランドグループ)・山田 浩二)

【鉱山探訪】大塔鉱山

和歌山県の鉱物について調べていたら、「大塔鉱山」という言葉が出てきました。読んでいきますと、私の好きな蛍石鉱山であること、湯の峰温泉の近くであることが分かりました。こうした情報は探索のルート等にはなかなか触れませんので、まず行動から出発せねばなりません。

3月27日(火)午前11時20分、自宅を出発し、阪和道で田辺まで、そこからは中

辺路を通過し、本宮町に到着です。まず、熊野川支流であります「皆瀬川」の探索です。川は鉱物探訪にとっても様々な情報を与えてくれます。蛍石らしきものは発見できませんでした。水晶はあちこちにありそうです。



まず、A地点です。熊野川本流に合流する直前の地点です。大塔山を源流とするだけあってこの地点でも丸みを帯びた石が並んでいます。砂もたくさんあります。



A地点の様子

B地点の様子です。川岸にあります1立方メートルくらいの岩を観察しますと5~

15 ミリメートルくらいの水晶が無数にくっついています。



B 地点の川原

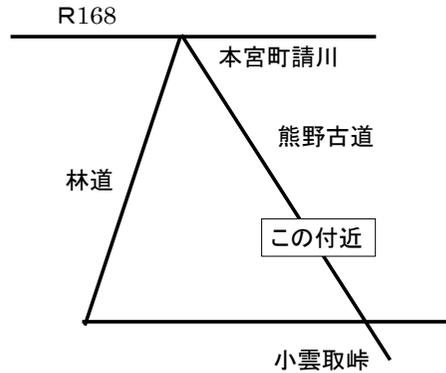


水晶群

C 地点では特記するものを見つけることはできませんでした。

この短時間の探訪で、特にわかることはありませんでしたが、やはり、現地に出向いて何かの情報を得ようとする事は改めて基本で、大切なことだと認識しました。

その後、国土地理院の 25000 分の 1 の地図を手に入れ、大塔鉱山は熊野古道近くにありそうだという情報等を勘案し、次回の探訪はかなり、接近できそうな手ごたえを感じ始めました。



(川村 甚吉)

## 行事レポート

### 春の七草摘みハイキング

日時：2012 年 1 月 6 日 (金) 10:00~12:30

場所：蕎原ほの字の里周辺

参加者：19 名

数日來の悪天候から、行事を早めに切り上げるタイミングや行程ばかり考えていましたが、当日は風もなく、陽射しの温かい七草摘み日よりでした。

昨年末の下見時に、春の七草のうち栽培種のすずな (カブラ)・すずしろ (ダイコン) 以外がそろって生えている場所を確認していましたが、川村前館長が、参加者へのお土産に七草セットを準備してくださっていたので、スタッフの気持ちも何かにつけ余裕がありました。

10 時過ぎ、ほの字の里グラウンドに集合した参加 8 家族を前に、高橋館長のあいさつで行事が始まりました。スタッフ紹介に続き、男子小学生が「セリ・ナズナ・ゴギョ

ウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ」とスラスラ七草の名を挙げてくれたので、七草を摘む際に少し厄介な、ゴギョウとホトケノザ（ともにキク科）の説明から始めました。

ゴギョウの現在の標準和名（\*）はハハコグサです。春に黄色い花を咲かせますが、今の時期は田んぼの畦道などに、白っぽい緑色のへら形葉（1cm～3cm）が、へばりついています。数も少なく、おまけに小さくて見つけにくいものです。

ホトケノザは、現在の標準和名ホトケノザという植物ではなく、コオニタビラコです。コオニタビラコは湿り気のある田んぼの縁に生える植物ですが、冬の間乾田になる最近の田んぼでは、めっきり見かけなくなりました。

川村前館長の田んぼでは、七草のうち、ナズナだけが生えていないようですが、蕎原でもなかなか見つかりません。ナズナはどちらかというと都会の空き地や、都会に近い田んぼの周辺に多くあり、自然度の高い場所には少ないようです。

続いて七草摘みのマナーでは、田んぼにはそれぞれ持ち主が居られるので勝手に入り込まないように、またお粥にたくさん入れると青臭いだけでおいしくないから、欲張って採集しないこと、明日の朝は、「七草ナズナ、唐土の鳥が日本の土地に、渡らぬ先に」と囃子歌を歌いながら、トントンと包丁の音をたてて七草を刻むと、邪気を払い万病を除いてくださると言い伝えられていること、などをお話して、ほの字の里を出発しました。

目ざす場所は、イベントがらみで「ほの

字の里」が稲作をしておられる小規模な田んぼですが、長方形の2方に水の流れている水路があります。参加者は先に学習したことをヒントに七草を探し、見つかると、予めお渡ししていた割り箸を傍に立てて、スタッフに確認してもらいます。



七草摘みの様子

水路の中に生えているセリは、場所が限られているだけにわかりやすかったようですが、その他はなかなか見分けがつかないようでした。

意外にも子どもたちは、葉の色が他と異なるためか、数の少ないハハコグサを真っ先に見つけました。でも、オランダミミナグサの芽生えと区別がつかない、と困っている子どももいます。

ハコベはどこでもあるのに、単体になると特徴がわかり辛いようです。

ナズナの花は、タネツケバナとよく似ていて紛らわしいうえに、葉は他の草に紛れて目立たないと、みんなが愚痴っています。

コオニタビラコは、田んぼの縁だけに数多いことと、少し茶色みを帯びた緑が目にとまるようでした。

各家族ともつつまじやかに5種類を採集

し、他の田んぼや畑でも確認できるかどうか、修行に出向きました。

山側の土手にフユイチゴが赤い実をつけていて、持って帰って植えたいなどと言う子どもまでいて大人気です。

コオニタビラコは、やはりどの田んぼの縁にも数多く見られ、ハコベはどこにでもあり、セリは水路だけではなく、土手や畦道でも見つかりました。水路には、セリによく似たキツネノボタンが生えていて、毒を持っていると話すと、「ええっ、どこが違うんですか」と大騒ぎでしたが、なかなか違いを伝えられません。

ナズナとハハコグサは見つかりませんでした。ほの字の里に戻って、お餅入り特製七草粥とサービスのお漬け物を、文字通りお腹いっぱいいただきました。

結論を言うと、日頃から野の植物に興味を持っていないと、たった5種類とはいえ、その区別はなかなか難しいようです。けれど、これを機会に少しでも植物や植物名に関心を持ってもらえたらうれしい、と思ったことでした。

形のよいスズナ、スズシロも加えた七草セットと、自分で摘んだ控えめな七草の両方を荷物に納めて、午後1時前に解散しました。

\* 標準和名：日本において学名の代わりに用いられる生物の名称

(白木 江都子)

## 打ち上げ貝拾い

日時：2012年2月5日(日) 13:00~15:30

場所：近木川河口・自然遊学館多目的室

参加者：17人

行事の下見を行った結果、今年のこの時期に比べると、今年は二色の浜に打ち上げ貝を含めた漂着物が少なかったため、近木川の河口右岸で行いました。

例年通り、講師として貝にお詳しい児嶋格さんに来て頂き、サポートスタッフとして、鈴子さん、廣野さんにもご協力頂きました。はじめに児嶋先生より、打ち上げ貝を拾うコツを話して頂き、参加者の皆さんは小一時間、海岸線に沿って見つけた物を拾っていきました。



近木川河口で打ち上げ貝を拾う

アサリやマガキ、シマメノウフネガイなどが多い中、桃色をしたきれいなサクラガイはレアーで人気の的でした。また、この辺りではあまり見かけないハツユキダカラというタカラガイも見つかりました。この日みんなで拾った貝は計41種類で、その他の海岸動物を含めたリストは次頁の表にまとめました。

観察会で確認した打ち上げのリスト 貝塚市立自然遊学館

			近木川河口 2012/2/5 17人
グループ	和名		
1	腹足綱	ヨメガカサガイ科	マツバガイ rr
2		ニシキウス科	コシダカガンガラ r
3			イシダタミ r
4		アマオブネガイ科	イシマキガイ rr
5		タマキビ科	タマキビ r
6			マルウスラタマキビ rr
7		カリバガサガイ科	シマメノウフネガイ cc
8		タカラガイ科	ハツユキダカラ rr
9		タマガイ科	ツメタガイ c
10			ハナツメタ rr
11			アダムズタマガイ rr
12			ネコガイ rr
13		アッキガイ科	イボニシ r
14			アカニシ r
15		フトコロガイ科	ムギガイ r
16			ムシロガイ科 アラムシロ c
17		カラマツガイ科	カラマツガイ rr
18	二枚貝綱	フネガイ科	カリガネエガイ r
19			サルボウガイ c
20		イガイ科	ムラサキイガイ r
21			ホトギスガイ c
22		ナミマガシワ科	ナミマガシワ c
23		ウミギクガイ科	チリボタン rr
24		イタボガキ科	マガキ cc
25		ツキガイ科	イセシラガイ rr
26		バカガイ科	バカガイ r
27		チドリマスオ科	クチバガイ c
28		ニッコウガイ科	サクラガイ r
29			ヒメシラトリガイ r
30			ハザクラガイ rr
31		マテガイ科	マテガイ rr
32		マルスダレガイ科	オニアサリ r
33			カガミガイ r
34			アサリ cc
35		オオノガイ科	オオノガイ rr
36	淡水産	カワニナ科	カワニナ rr
37		タニシ科	ヒメタニシ rr
38		リンゴガイ科	スクミリンゴガイ c
39		サカマキガイ科	サカマキガイ rr
40	陸産	アズキガイ科	アズキガイ r
41			オナジマイマイ科 オオケマイマイ rr
42	頭足綱	コウイカ科	コウイカ科の一種 r
43	甲殻類	ガザミ科	タイワンガザミ r
44		モクズガニ科	モクズガニ rr
45			イソガニ rr
46	ウニ類	サンショウウニ科	サンショウウニ rr
47	多毛類	カンザシゴカイ科	カンザシゴカイ類の棲管 rr
48	魚類		ボラ類 rr
計			46

凡例：数量……cc 多数、c 普通、r 少数、rr ごく少数 生体確認……(L)

館に戻ってからは、自分の拾った貝の名前を教えてもらい、その中から気に入った貝殻を紙皿に貼っていく作業を行いました。仕上がった作品は行事の思い出のつまった記念品として、各自持ち帰って頂きました。



紙皿に拾った貝を貼る

(山田 浩二)

千石荘&近木川河口

バードウォッチング

日時：2012年2月26日(日) 10:00~15:00

場所：貝塚市千石荘・近木川河口

参加者：15人(千石荘)

19人(近木川河口)

今年度もたくさんの野鳥が観察できる冬の時期に千石荘と近木川河口でバードウォッチングの行事を行いました。

午前中は千石荘で冬の里山に暮らす鳥たちの姿を探しました。最初にスタッフ紹介と、貝塚市内の野鳥を長年観察されている食野俊男さんからコースの説明をしていただきました。歩き始めるといきなり上空にタカの仲間ミサゴが現れ、幸先の良いスタートになりました。

林の中から聴こえてくる鳥たちの声に耳を澄ませて、ヒヨドリやメジロの姿を探しながら歩いていくと、少し離れた木々のてっぺんにツグミの群れが見られました。ツグミは例年ならば、この時期は平野部に

もたくさん降りてきて、地上で採餌する姿が見られるのですが、今年の冬はまだ平野部ではその姿がほとんど見られず、山の方向に残っているようです。カンコ池に向かう小道を歩いていると、上空低いところをオオタカの成鳥が飛んでいく姿が見られました。

カンコ池ではカイツブリや、カモの仲間のキンクロハジロやカルガモがたくさん浮かんでおり、岸边にはアオサギやダイサギも見られました。オオバンとバンがすぐ近くに出てきてくれて、2種の嘴の色や体型などの違いをよく観察できました。

カンコ池から次のコースに向かう途中、道端にホオジロの仲間のアオジが雌雄2羽で出てきていました。アオジは暗い茂みの中が好きな鳥で、このように開けたところに出てくることは少なく、道端で餌を採る様子がフィールドスコープを使って全員で観察できたのはラッキーでした。その後また上空にオオタカが飛んでいるのを見つけ、今度は少し高いところで成鳥2羽が丸く円を描くような飛び方をしていました。

ボタン池に向かう林の中では、この冬ツグミと同じく平野部でほとんど姿を見かけなかったシロハラが「キョキョキョキョ・・・」と独特の鳴き声を出して飛び去る姿も何度か見られました。大井谷池周辺の農耕地では上空をタカの仲間のノスリがゆっくりと飛ぶ姿が観察でき、畑にはチドリの中のケリが2羽降りているのも見つかりました。

午後からは近木川河口に移動し、河口部に集まる鳥たちを観察しました。近木川の河口にはカモの仲間が多く見られ、ホシハジロの150羽を超える群れが浮かんでいる様子や、潮の引いた干潟で餌を探すヒドリガモやオナガガモ、コガモの群れを観察しました。

上空にはミサゴやトビ、セグロカモメ、カワウなどが飛んでいて、それぞれ飛んでいる時の姿（翼や尾羽などシルエットや色）、羽ばたきなどの飛び方の違いを見比べました。

近木川の汽水域を上流の方へ歩いていくと、干潟にハクセキレイやイソシギが飛んできて、腰や尾羽を振りながらせわしなく歩き回って餌を探していました。コサギやアオサギ、カルガモなどの姿も見られ、アオサギはちょうどこれから繁殖の時期を迎えるのでしょうか、嘴がこの時期限定の綺麗なピンクの婚姻色をしていました。



千石荘でのバードウォッチングの様子



アオサギ

最後にまとめとして今日観察できた野鳥を図鑑で紹介して、解散しました。

この冬は全国的に冬鳥が少ないと言われていますが、今回の行事でも例年もっと多く見られるはずの小鳥類などが種類も個体数も少なかったようにも感じられました。鳥たちの様子を毎年見続けていくことで、自然界の異変もうかがい知ることが出来るかもしれません。

#### 【千石荘で観察できた野鳥 25種】

カイツブリ、カワウ、カルガモ、キンクロハジロ、ダイサギ、アオサギ、オオバン、バン、ケリ、ミサゴ、トビ、ノスリ、オオタカ、キジバト、ヒヨドリ、ツグミ、シロハラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

#### 【近木川河口で観察できた野鳥 18種】

カワウ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ホシハジロ、コサギ、アオサギ、セグロカモメ、イソシギ、ミサゴ、ト

ビ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、アオジ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

(NPO 法人南港ウェットランドグループ

和田 太一)

### 自然を食すⅢ

日時：2012年3月25日(日) 12:00~14:30

場所：自然遊学館多目的室

参加者：23人

講師 栗山 昭 先生

目的 春の恵みを感じて食す

メニュー

イカメシ、キノコ汁、天ぷら（ツクシ、レンゲ、カラスノエンドウ、セリ、ハコベ、フキノトウ、フキの葉、イワシ）、ヨモギもち、柿の葉茶

今回も、うれしい悲鳴からのスタートです。この取り組みが始まって12回目となりましたが、回を重ねるたび参加希望が多く、「広報を見てすぐに申し込みをしたが駄目であった」などの苦情が数多く届きます。この問題は次年度への課題とし、より公平な道を探ってまいります。参加できなかった皆様、申し訳ありませんでした。

さて、定刻通りのスタートです。今回は人数調整した班割で、指定した場所に座ります。そこには名札があり、出席が一目で分かるよう工夫しました。

また、机にはあらかじめ、メニューを一例に並べました。皿ごとに違うので、例えば、カラスノエンドウとレンゲの天ぷらを

間違えることはありません。だから、それぞれの感想を聞くのには有効な工夫です。

とにかく、この活動は挨拶の前に食べ始めるところにあります。食べ終わってから、料理法や食材の解説をするというスタイルです。



本日のメニュー

用意しました、イカメシは 16 カップ、キノコ汁は 40 人分、天ぷらのおかずは、少なくとも一人一つ以上 8 種類ありますから、通常の食事では食べきれないほどです。しかし、30 分もたたないうちに完食です。

あらかた片付けてから、改めての挨拶と、講義 2 本です。最初に栗山先生から、レシピや留意点の説明です。次は自分でも作ってみようと意欲的にメモを取られている方がたも多かったです。

私からは光孝天皇が万葉集に残しています、「君のため 春の野に出て 若菜摘む 我が衣手に 雪が降りつつ」という和歌の思いを話しました。

最後に、栗山先生から改めて天ぷらの上手な揚げ方を教えてもらいました。今回は特に「かき揚げ」について詳しく教えてく

れました。多くの方は天ぷらに自信を持ったようです。



説明する栗山先生

また、「酢わかめ」を全員に実習されました。本当はお土産用として袋なども用意していましたが、あまりにもおいしいのか、出来上がった酢ワカメをみんな食べてしまいました。

なお、この活動には産経新聞が取材にいられていました。

(川村 甚吉)

## 館長コーナー

### 桜に想うⅡ

自然遊学館館長に就任し二年目になります。この間たくさんの生きものや自然との出会いがありました。今年も心がうきうきするような出来事をたくさん伝えられるよう努めます。ご支援よろしく申し上げます。

さて、昨年に続き、春の遊学館だより、館長コーナーは桜からスタートしました。春の一番の楽しみが桜という私は、今年も静岡県の河津桜を見に出かけました。今年は冬の寒さが影響し、例年より一月近く遅れた開花となったようです。



2012. 3. 3 撮影 河津桜

この日の桜は一分から二分咲きで花の数も少なく、つぼみがほとんどという寂しいものでした。しかし、川岸には菜の花が咲き土手を鮮やかな黄色に染めていました。そして、つぼみの桜の横には白い梅の花が咲き、ウグイスの鳴き声が聞こえ、いつもとは違う風景でした。これもまた、趣があつてよいものでした。

#### 河津桜（河津町観光パンフレットより抜粋）

原木は河津町田中の飯田勝美氏が1955年頃、偶然発見した桜の苗を植えたもの。1966年から開花が見られ、1月下旬から淡い紅色の花が約1か月咲き続けるようになり注目を集めた。その後増殖され、現在に至っている。この特徴ある早咲き桜は河津町に原木がある事からカワツザクラ（河津

桜）と命名され、1975年に河津町の木に指定された。カワツザクラは早咲きのオオシマザクラ系とカンヒザクラ系の自然交配種と推定されている。

4月になると一気に暖かさが押し寄せ、春の到来となりました。遊学館近くの二色浜もご覧の通り桜が満開となりました。



2012. 4. 13 撮影 二色の浜の満開桜

4月に入ると暖かい日も多く、お年寄りから小さな子どもたちまで、多くの人が連日のように二色浜を訪れ、桜を満喫していました。遊学館も桜に包まれました。



2012. 4. 13 撮影 遊学館と桜

撮影した日は散り始めという頃でした。しかし、まだ存在感は十分でした。名刺づくりの好きな私は、今年はこの画像入りの名刺を作ることにしました。

桜の季節も終わりを迎え、新年度が始まり一月が過ぎました。昨年の今頃のことをいろいろ思い出し、時には反省しながら今年も有意義な一年になるよう頑張ります。

## 最後に

つつじの花が満開になる5月になるとカワモズクの様子が気になります。昨年発見されてから今日まで、新しい情報は追加されていませんが、心無い人に荒らされなければ、今年もまた見ることができることは間違いありません。

貝塚には、たくさんの自然が残されています。水田が減り、昔ながらの田園風景は減っていますが、そこに生きてきた生きものや植物はたくさん残っています。しかし、外来種が増えてきていることも事実です。

私たち自然遊学館は貝塚の自然環境を見つめ、自然を守る心を育てるとともに、美しい自然を守るにはどうすればいいのか？そのために何をすればいいのか？も皆様に提案していきたいと思っています。

## 遊学館からのお知らせ

このコーナーを借りて遊学館から皆様にお知らせがあります。

4月27日から遊学館の特別展示会場が変わりました。場所は遊学館近くの元関空交流館のあった場所です。

関空交流館は昨年から休館となり、改修工事が行われていたことは皆様ご存じの

ことと思います。その改修工事が4月には終わりました。そして、その後を自然遊学館が1年間、特別展の会場として利用することになりました。

特別展として予定されているテーマは以下の通りです。

- 4月～5月 生きもの切り絵（開会中）
- 6月 絶滅危惧種と外来種
- 7月～9月 淡水・海水プランクトン
- 10月 大阪の赤とんぼ
- 11月～12月 カタツムリ
- 1月～3月 2012年の遊学館の出来事となっています。

いずれも会場は元関空交流館です。

尚、特別展の開会期間など、詳細は遊学館の2012年行事予定表をご覧ください。

(高橋 寛幸)

## 調査速報

### アミカ

2012年3月12日、近木川本流・そぶら山荘付近（標高約260m）において、水生生物の調査を行う機会があり、単発ながら2名で約1時間、タモ網を使って採集を行いました。パックテストで簡易な水質検査を行うと、CODも窒素もリンも最低レベルの「きれいな水」でした。それに対応して、水生生物による水質判定の水質階級Ⅰ（きれいな水）の指標生物9種のうちの6種も確認されました。アミカ、カワゲラ、サワ

ガニ、ナガレトビケラ、ヒラタカゲロウ、ヤマトビケラです。水質階級Ⅱ（少し汚れた水）の指標生物9種のうちではコオニヤンマ幼虫だけが確認され、水質階級Ⅲ（汚れた水）と水質階級Ⅳ（大変汚れた水）の指標生物は全く確認されませんでした。

ここで紹介する水生昆虫は、きれいな水の指標生物の1つに選ばれているハエ目のアミカです。図1左が幼虫の背面、図1右が幼虫の腹面です。大きさは2mm程度で水生昆虫の中でもかなり小さい方です。



図1. アミカ科幼虫（左：背面；右：腹面）

なんと言っても目立つのは腹面にある6個の吸盤で、これで水中の石にへばりついているそうです。自然遊学館が行ってきた川の水生生物の調査では、これまで津田川の塔原（標高約380m）で1個体採集されているだけでした。今回は2個体目、近木川では初めての記録となりました。石にへばりついていて、しかも小さいので、自分たちのタモ網による採集方法では捕まえにくかったのかもしれませんが。吸盤が見やすいように斜めから撮影してみました（図

2）。頭部から突き出しているのは触角です。かわいいのか気持ち悪いのか微妙な感じ（？）でしょうか。

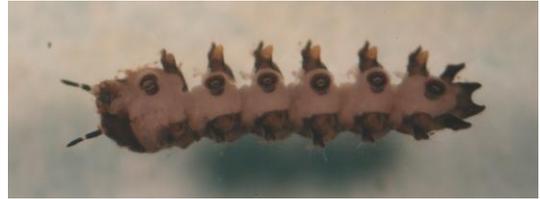


図2. アミカ科幼虫（斜めのポーズ）

少し教科書から抜粋してみます。「吸盤がある最初の節は、頭部と胸部3節と腹部第1節が融合したもので、吸盤のない最後の節は腹部第7節以降が融合したものだ」だそうです。「山地溪流にすみ、水中の石の表面の微細藻類を食べ」、今回採集されたヤマトアミカ属の一種と同定されるものは、おそらく幼虫で越冬し春に羽化するものと思われます。残念ながら、アミカ科の成虫の標本は自然遊学館にはありません。本谷や東手川で行った夜間のライトトラップで白幕には来ていたのですが、小さいハエは同定が難しいので採集しなかったものと思われます。

ここからは推測の話です。同じく山地溪流のきれいな水にすみ水質階級Ⅰの指標生物に選ばれているブユ科の幼虫も、腹部の後端に吸盤を持っています（図3）。体が小さいことも共通しています。



図3. ブユ科幼虫 (左が頭部)

川にすむ水生昆虫は多かれ少なかれ、幼虫の時期に流下し、成虫の時期に遡上します。トンボや大型のカワゲラやトビケラを見れば分かるように、成虫がある程度大きな翅を持てば遡上する能力も高いでしょう。反対に、アミカやブユのように小さいと、川を下る風に打ち勝って遡上することはかなり困難だと思われます。流下しない「まぐれ」を期待して多産になろうとしても小さな体では限界があります。というわけで幼虫に吸盤があるのかもしれませんが。

川の上流で水生生物による水質判定を行う場合は、アミカやブユのような小さな体で吸盤を持ったものもいることを頭に入れて、石や落葉の表面にも気をつけて採集する必要があります。

最後になりましたが、当日に採集された水生昆虫のリストを示しました。27種という結果は、これより上流の本谷で2000年3月に行った調査での27種、翌年3月の31種、休場橋での2008年3月の26種、あるいは、これより下流の落合橋での1999年3月の22種とほぼ同程度の種数であると言えます。

表1. 近木川そぶら山荘付近で採集された水生昆虫

調査日：2012年3月12日  
 調査者：岩崎拓・山田浩二

目	科	種
<b>カゲロウ目</b>		
	ヒラタカゲロウ科	タニヒラタカゲロウ ユミモンヒラタカゲロウ ナミヒラタカゲロウ エルモンヒラタカゲロウ クロタニガワカゲロウ
	マダラカゲロウ科	クロマダラカゲロウ オオマダラカゲロウ
	コカゲロウ科	コカゲロウ属・・・少なくとも3種
	フタオカゲロウ科	ヒメフタオカゲロウ属
	トビイロカゲロウ科	トビイロカゲロウ属
	モンカゲロウ科	フタスジモンカゲロウ
<b>トンボ目</b>		
	ムカシトンボ科	ムカシトンボ
	サナエトンボ科	コオニヤンマ クロサナエ
<b>カワゲラ目</b>		
	アミメカワゲラ科	アミメカワゲラ族
	シタカワゲラ科	属不明種
	カワゲラ科	オオヤマカワゲラ属 フタツメカワゲラ属 トウゴウカワゲラ マエキフタツメカワゲラモドキ
<b>トビケラ目</b>		
	ヒゲナガカワトビケラ科	ヒゲナガカワトビケラ
	ナガレトビケラ科	ナガレトビケラ属
	ヤマトトビケラ科	ヤマトトビケラ属
	カクツツトビケラ科	コカクツツトビケラ属 (筒巢)
<b>ハエ目</b>		
	アミカ科	ヤマトアミカ属
	ガガンボ科	ガガンボ属 属不明種

(岩崎 拓)

**泉州生きもの情報**

**二色の浜に打ち上げられた  
ヒラタブンブク**

2012年1月26日、二色の浜の砂浜で漂着物を見嶋格先生と調べた際に、ヒラタブンブクというウニの仲間が6個体打ち上がっていたので採集しました。また、翌週の2月4日にも4個体の打ち上げを確認しました。

これまで例年では、二色の浜で打ち上げられたブンブク類として、オカメブンブクがもっともよく見られる種でありましたが（本誌23号など）、去年はブンブクチャガマが初めて見つかり（本誌59号）、今回のヒラタブンブクも打ち上げとしては初記録になります。



**ヒラタブンブクの殻（背面）**  
（二色の浜打ち上げ、2012年1月26日）

二色の浜の浅海域では、2010年9月に黒岩直美さんが素潜りによりヒラタブンブクの生体を1個体採集していましたので（本誌57号）、生息していることは確認していましたが、今回の打ち上げ記録により、

多数の個体が生息していたことが推測されます。

生きている時の本来のブンブク類の姿は、細かい棘に覆われ、名前の由来のとおりタヌキが化けた分福茶釜のようです。生活様式も特殊で、砂や泥などの堆積物中に適応しています。このようにブンブク類は磯で普通に見かけるウニとは異なっていますが、実は種数ではウニ類全体の約25%を占めるウニ類最大のグループなのです。

（山田 浩二）

**ヤドリギの実**

和泉葛城山の山頂には寄生植物のヤドリギが生えています。土から生えているのではなく、他の木の枝から生えて、水や養分を横取りしているのです。漢字では「宿り木」とか「寄生木」と書きます。エノキ、サクラ、クリ、ブナといった寄主となる木は落葉樹で、ヤドリギの方は常緑なので、寄主木の葉が落ちている冬は、特にヤドリギが目立つこととなります（図1）。



**図1. ブナに寄生した多数のヤドリギ**  
（和泉葛城山山頂、2012年3月21日撮影）

高い所に生えていることが多いので花を見たり実を採ったりすることがなかなかできませんが、3月21日に上久保文貴先生が柄付きの道具を使って採集してくれました(図2)。2又に分かれながら枝が伸びていくようで、次の2又が同じ面で分岐すれば平たい構造に、ねじれて分岐すれば立体的な構造になります。それで樹上では「うまく調節して」ボールのような形になっているのだと思います。



図2. 採集されたヤドリギ  
(左下はカッターナイフ)

ほとんどの実は又の部分に成っていました(図3)。色は薄黄色をしていて、大きいもので直径8mmありました。1つ食べても味が分かりません。5つまとめて食べてもほとんど味がしません。舌触りはネバネバするブドウという感じでしょうか。ネバネバはやたらと糸を引きます。



図3. ヤドリギの実

このネバネバした果肉を取り除くと、中から濃い緑色をした種子が出てきました(図4)。この種子を鳥たちに運んでもらうため、あるいは種子混じりの糞を樹上で枝にくっつけてもらうために、ネバネバで糸を引く果肉を「発明」したのでしょうか。



図4. ヤドリギの種子

楕円形をした種子には頂点が1つ、方形をした種子には頂点が2つあります。方形になったのは胚芽が2つ合体したもので、芽が2本出るそうです。鳥たちに食べられなかった実は腐って落下するのか(して下の枝に付いたりすることがあるのか) 実験

してみたのですが、落下せずに乾燥しただけで終わりました。



図5. ヤドリギの種子から出た寄生根

採集した日に、1個の種子を遊学館前に植えているブナの枝に付けてみました。4月12日までは外見に何の変化もなかったのですが、4月14日に見ると寄生根を伸ばしてブナの枝に侵入しようとしている様子です。「ついに本性を現した」といった感じです。ブナが弱らない程度に観察を続けていこうと思います。

(岩崎 拓)

### 寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2012年3月分まで)

#### <植物>

- ◆川口博さんより  
クヌギのどんぐり 多数

貝塚市二色 2011年10月30日採集  
(展示用に集めていただきました)

#### <哺乳類>

- ◆常道武士さんより  
ヌートリア 死体1点  
貝塚市二色の浜 2012年1月22日採集
- ◆醫山敦生さんより  
ヒョウ 毛皮1点  
賞品

#### <鳥類>

- ◆北田誠さんより  
ウグイス 巣1点  
貝塚市三ツ松 2012年1月31日採集
- ◆食野俊男さんより  
カワラヒワ 巣1点  
貝塚市二色の浜 2012年3月1日採集
- スズメ 死体1点  
貝塚市近木 2012年3月10日採集

#### <魚類>

- ◆藪下哲也さんより  
ウナギ 生体1点  
ミミズハゼ 生体9点  
近木川河口 2012年3月23日採集
- ウキゴリ 生体1点  
見出川 2012年3月23日採集

#### <軟体動物>

- ◆濱谷巖さんより  
マベガイ 1点  
鹿児島県奄美大島  
1958年3月10日採集

◆ 覚野信行さんより

ヒバリガイ 奇形個体 1点  
泉南市マーブルビーチ  
2012年3月11日採集

◆ 岡村親一郎さんより

コフジガイ 生体 1点  
(泉南沖産のシャコ生体に付着)

2012年3月29日  
尾崎漁港の漁船による採集

◆ 児嶋格さんより

コフジガイ 生体 3点  
(大阪湾沖ノ瀬産のシャコ生体に付着)

2012年3月30日  
佐野漁港の漁船による採集



シャコの歩脚の付け根に付着したコフジガイ

コフジガイは、二枚貝特有の足糸という分泌物を使ってシャコの体表面に特異的に付着（共生）します。大阪湾では最近増えているという岡村先生の話でした。付着の経路やシャコの脱皮時の行動などがはっきり分かっていないそうです。岡村

先生からは、「飼育して、シャコの脱皮の時にコフジガイがどう行動するのか調べて」と仰せつかりました。現在、遊学館の玄関ホールの大阪湾の魚水槽内で展示飼育しています。

<甲殻類>

◆ 江本大地さんより

ヤマトカラッパ 打ち上げ死体 1点  
和歌山県南部 2012年1月9日採集

◆ 井上誠一さんより

ツノナガゴブシ 打ち上げ死体 1点  
貝塚市二色の浜 2012年3月26日採集

◆ 岡村親一郎さんより

シャコ 生体 1点  
泉南沖 2012年3月29日  
(尾崎漁港の漁船による採集)

◆ 児嶋格さんより

シャコ 生体 3点  
大阪湾沖ノ瀬 2012年3月30日  
(佐野漁港の漁船による採集)

<クモ>

◆ 児嶋格さんより

アリグモ 成体 1点  
和歌山県紀ノ川市 2012年2月8日採集

◆ 上仁貴世さんより

セアカゴケグモ 成体 1点  
貝塚市二色 2012年3月18日採集

<昆虫>

◆ 吉田浩史さんより

・アカスジチュウレンジ 成虫 1点  
貝塚市馬場 2009年4月29日採集  
同 成虫 2点  
貝塚市千石荘 2009年5月2日採集

- ・ニホンチュウレンジ 成虫1点  
貝塚市大川 2011年5月20日採集
- ・ワラビハバチ 成虫1点  
貝塚市木積 2009年4月16日採集
- ・タケウチナナフシハバチ 成虫1点  
貝塚市木積 2009年4月16日採集



タケウチナナフシハバチの標本

- ・カタアカスギナハバチ 成虫1点  
貝塚市千石荘 2009年5月2日採集
- ・サクラヒメハバチ 成虫1点  
貝塚市千石荘 2009年5月2日採集
- ・ウマノアシガタハバチ 成虫1点  
貝塚市蓄原 2011年5月20日採集
- ・ハグロハバチ 成虫1点  
貝塚市千石荘 2009年4月16日採集  
同 成虫1点  
貝塚市千石荘 2009年5月2日採集  
同 成虫1点  
貝塚市蓄原 2011年5月20日採集
- ・オオシロオビクロハバチ 成虫1点  
貝塚市千石荘 2009年4月16日採集
- ・セグロカブラハバチ 成虫3点  
貝塚市蓄原 2011年5月20日採集
- ・ニホンカブラハバチ 成虫1点  
貝塚市馬場 2009年4月29日採集
- 同 成虫5点  
貝塚市蓄原 2011年5月20日採集
- ・イヌノフグリハバチ 成虫1点  
貝塚市千石荘 2009年4月16日採集
- ・ツノキクロハバチ 成虫1点  
貝塚市馬場 2009年4月29日採集
- ・フトコシジロハバチ 成虫3点  
貝塚市馬場 2009年4月29日採集
- ・クロハバチ 成虫2点  
貝塚市千石荘 2009年4月16日採集  
同 成虫2点  
貝塚市馬場 2009年4月29日採集  
同 成虫1点  
貝塚市千石荘 2009年5月2日採集
- ・コクロハバチ 成虫1点  
貝塚市木積 2009年4月16日採集  
同 成虫2点  
貝塚市馬場 2009年4月29日採集
- ・コキモンハバチ 成虫2点  
貝塚市馬場 2009年4月29日採集
- ・オニタビラコキモンハバチ 成虫1点  
貝塚市木積 2009年4月16日採集  
同 成虫1点  
貝塚市千石荘 2009年5月2日採集
- ・キコシホソハバチ 成虫1点  
貝塚市蓄原 2011年5月20日採集
- ◆江本玲子さんより  
オオカマキリ 卵囊1点  
岸和田市河合町 2011年12月18日採集

<寄贈写真>

- ◆上之山賢治さんより  
柊鯛 3点  
泉南市馬場 2012年2月19日撮影

柊鯛 11点

ヒイラギ 9点

泉南市馬場 2012年2月26日撮影

◆食野俊男さんより

ハイイロチュウヒ 1枚

貝塚市二色南町 2012年3月16日撮影

綿石慶太さんから貝塚人工島にハイイロチュウヒがいるという情報をいただき、食野俊男さんから撮影を依頼しました。表紙の写真をご覧ください。自然遊学館がこれまでに記録してきた貝塚市の鳥類のリストで188種目となりました。

### 自然遊学館だより No.62 の訂正

自然遊学館だより前号の濱谷巖さんからのオシャグジデンド標本の採集日に関して、誤記を訂正せずに一部の冊子を発行してしまいました。謹んでお詫び申し上げます。ここに上久保文貴さんの解説とともに再掲致します。

◆濱谷巖さんより

オシャグジデンド 1点

和泉葛城山山頂 1949年12月29日採集



濱谷巖氏寄贈のオシャグジデンド標本

## オシャグジデンド *Polypodium fauriei* (ウラボシ科)

和名は、濁点つづきの言いにくい奇妙な名前ですが、牧野植物図鑑によると信州木曾地方の「お社貢寺」(シャグジ)というお寺の森で発見され、命名されたということです。(デンドはシダの古名)

深い山地のブナやトチノキなどの、大木の幹や大きな岩などに着生する小形のシダです。根茎は太さ4mmほどで樹幹や岩などに張り付くように伸び、毎年秋には長さ20cmほどの新しい葉を出し、ブナやトチノキなどの落葉樹が葉を落とす冬から春の間にしっかり日光を受け、成長し養分を蓄え繁殖ための胞子もつけて落葉樹が葉を展開する初夏のころには葉は枯れてしまい、真夏のころには根茎だけが残り休眠期に入ります(冬緑性)。この生活スタイルはオシャグジデンドのような小さなシダが、深い森の中で生き延びるための巧みな戦略かも知れません。

葉は乾くと表面を内にして、ぜんまい状に丸く巻く性質があり、乾燥標本にしても丸く曲がった標本になります。オシャグジデンドが乾燥から身を守るための性質かも知れません。

分布域は広く日本では北海道から九州まで分布しますが、個体数は少ない所も多く茨城、埼玉、山梨、和歌山、香川、福岡、佐賀、大分、鹿児島などの各県では、絶滅危惧種に指定されています。大阪府では金剛山、箕面、樫田(高槻市北部)、和泉葛城山などで古くから分布が確認されています(大阪府植物目録 桑島 1966)が、

金剛山では道沿いのトチノキの大木の幹の高い所などで今も見られ、箕面でも大きな岩に着生したのが見られます。和泉葛城山では、最近の確認情報はなく、2009年度から行われている自然遊学館の和泉葛城山植物調査でも発見されていません。残念ながら現在の生息状況は不明です。

今回、濱谷巖先生よりご寄贈いただいたオシャグジデンダの標本は、1949年12月に和泉葛城山頂付近で採集されたものですが、63年間、保存状態もよく根、茎、葉、胞子もついたしっかりした標本で、戦後の混乱期の数少ない標本としても貝塚市にとっては大変貴重な標本です。

(上久保 文貴)

## 新スタッフ紹介

### 久妻さゆり

はじめまして。4月から自然遊学館のスタッフとしてアルバイトさせていただくことになりました奈良女子大学の久妻さゆりと申します。大学では情報科学について学んでいます。生物とは全く関係ないので、わからないことも多いのですが、アルバイトを通して、みなさんと一緒に学んでいきたいと思っています。

また、館から家まで自転車で7分という近さから、幼い頃からよく友達と遊びに来ていました。私にとって自然遊学館が親しみのある館であるように、みなさんにとってもそう思われるために、スタッフとして

頑張りたいと思います。よろしくお願いいたします。



### 岡田真太郎

皆様、初めまして。この春から自然遊学館で日曜日にアルバイトをさせて頂く岡田真太郎です。主に水槽の手入れなどを担当します。私は小さい頃から魚釣りが大好きで、魚にも大変興味があります。現在、私は近畿大学農学部水産学科に通っています。将来は日本近海の身近な魚の生態などを調べて、現在漁獲量が減少している魚などを守っていきたくと考えています。



## お知らせ

この自然遊学館には海の魚だけではなく、多くの淡水魚も飼育しています。少しでも自然や生きものに興味のある方は是非一度この自然遊学館に足を運んで頂けたらと思います。自然遊学館に来られた際は、是非気軽に声を掛けて下さいね。宜しくお願い致します。

## スタッフ日誌

1月23日、自然遊学館周辺の植物の棚に、春の七草を、鉢植えにして展示しています。1月も半ばを過ぎ、引き続き七草の展示とともに、冬芽の展示をしました。クヌギ、アベマキ、コナラなど主にドングリのなる樹の冬芽です。クリの樹の冬芽は、小さい栗がついているような芽でわかりやすいです。



左からクリ、アベマキ、クヌギ、コナラの冬芽

2月になると、(春はまだまだですが) 日当たりの良い空き地などでは、春の草花の芽生えが見られます。カラスノエンドウ、ホトケノザ、オオイヌノフグリなどです。探してみてください。(湯)

## 特別展示のご案内

### 「貝塚市の絶滅危惧種と外来種」

場所：自然遊学館特別展示会場  
(関空交流館)

期間：2012年6月1日～6月30日  
(月・金・土・日曜日に開催)

外来種は新たに別の場所から入ってきた種で、一般的には外国から持ち込まれたものを言います。絶滅危惧種は、今は生息していても、生息場所の破壊や乱獲などで、これから居なくなってしまう可能性がある種のことです。

外来種の侵入も絶滅危惧も、私たち人間の活動が大きな影響を与えています。この特別展では、貝塚市でこれまでに確認された外来種と絶滅危惧種を写真や標本で紹介し、外来種の扱い方や絶滅危惧を引き起こしている要因について、考えてみたいと思います。

\* 自然遊学館だよりのバックナンバーは、下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2012 春号 (No. 63)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

発行日 2012. 4. 30

この小冊子は庁内印刷で作成しています。